
とある妖精少女の学園生活(ライフ)

橘天龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある妖精少女の学園生活

【Zコード】

Z0578Z

【作者名】

橋天龍

【あらすじ】

アンデルセン様の作品、とある吸血鬼始祖の物語のスピンオフ作品です。私はあちらの作者様のように細かい背景描写は出来ませんので、本格的なファンタジー小説がお好きな方はブラウザバックして下さい

第1話・【邂逅】（前書き）

今日は試験的な意味合いもあるので主人公の心理描写のみです ^{アリス} m (

—) m

第1話：【邂逅】

まー、なんと言いますか… 大盛り上がりですね。

あ、唐突ですみません。私はアリストテイル＝シュツルムハイゼン…長いのでアリスちゃんとかあっちゃんでいいデス。

んで、ここはエンデリック学園の魔法学科Sクラス。いわば魔法使いのヒーローの巣窟 もとい、集まりなんデス。だから私も優秀なんですヨ？

ま、私のことはともかく。この時期に編入生さんだそうで… クラスではその話でもちきりなんデス。

なんでも試験会場の魔法が外に影響しないようにする結界をいともたやすく破壊したとか。

あの結界は普通は壊せないはずなので眉唾物デスが、事実は事実なわけで。

そんなデストロイな子が私達のクラスメイトになるってことでウチのクラスは騒然としているわけデス。

それからほどなくして担任の先生が来ました

何のへんてつもない連絡事項の後、一件の転校生サンが呼ばれました

……幼女？

わたしと同じ幼女ですか！？

むむむ…見事なまでにキャラ被りテス。

まー相手は銀髪、わたしは金髪、相手はロリペッたん、わたしはロリ巨乳と差違はありますガ。

何はともあれあの子が噂の転校生サンなのは間違いなによひテス。

はてさて…どんなことから始めましょつか。

わたしは田の前のライバル（勝手に認定）を眺めながらこれから先の学園ライフに思いを馳せました

続く？

第1話・【邂逅】（後書き）

あちりの作品の世界観を上手く把握できていないのかなり変な構成で申し訳ありませんm(――)m

次話以降はなんとか構成するつもりです（あちりほどは出来ませんが）

第2話：【友人】（前書き）

ここでは主人公の設定を紹介します。アンデルセン様に送った設定と若干差違があるかもしれません、ご容赦下さい

名前：アリストテイル＝シュツルムハイゼン

声のイメージ：氷〇

性別：女

種族：エルフ

身長：132cm

3S：87・55・80

容姿：金髪のウェーブがかかつた髪を太股まで伸ばし、後頭部に緑色の巨大なリボン（端が頭からはみでるくらい）を結んでいる。瞳の色は薄い緑色で、どこか眠そうなトロンとした目つきをしている。体型はアンバランスで胸が目立つ。所謂口リ巨乳（笑）

性格：基本的におつとりだが、悪戯好き。でも自らが作った罠に自分でハマる、所謂墓穴を掘るタイプ。同じ口リだからといって勝手にレティをライバル視している。

得意魔法：風系魔法と雷系魔法。他もそれなりに得意だが、前述の2属性は高位の魔法も使うことが出来る。

備考：大陸でもそれなりに位の高い（子爵くらい）シュツルムハイゼン家の三女。シュツルムハイゼン家は優秀な魔法使いを輩出してきた家系で中でもアリスは家系が始まつて以来の天才と言われ、シュツルムハイゼン家がある地方ではエルフ族の始祖の生まれ変わりではないかと噂される存在だった。本人はそれを嫌い、家の権力が及ばない学園へさらなる魔法の研鑽を積むという名目で入学していく。

アンデルセン様に送った設定よりも若干加筆修正しております

（ ） m

第2話：【友人】

わたしが今後の展望をほくそ笑みながら妄想していると、唐突に髪が軽く引っ張られました

？？「アリス、独り言がだだ漏れしてるとわよ」

「フローラ、わたしの髪をあんまり引っ張らないで下サイ。ハゲたらどうするんですか？」

フローラ「ハゲるほど引っ張つてないわよ」

わたしは教師がレティさんに説明しているのを見計らつて後ろの人間に向かつて振り返りました

わたしの友人の1人、フローラ＝カドウケウス。銀髪のツインテールを腰まで伸ばし、瞳の色は青紫でツリ目、身長はわたしより高くてたしか160半ば、体重は…

フローラ「コラ。今失礼なこと考えてたでしょ」

「…なんのことデスか？」

わたしが目を逸らすとツリ目を細めてジーッと見据えてきました。かなり怖いデス、はい。

フローラ「まあ…いつものことだからいいけど、今はH.R.中なんだから自重しなさい」

「わかつておりますヨ姉御」

フローラ「誰が姉御よ」

わたしがにへらつと笑つて言つとフローラは呆れた表情をしてため息をつきました

それからかの転校生…レティさんはわたしよつと前に座りました。なんだか氣だるそうですね。

表情には出でいませんが、何となくそんな雰囲気がシマス。わたしはエルフの特性なのか、わたしだけなのか、相手の雰囲気を感じとする能力がありマス。

その能力故にレティさんがどこか氣だるそうに感じたわけデス。

だからどうしたと聞かれてもそれはそれで困るのですガ。

わたしがレティさんを穴が空きそうなほど凝視していると、一いちをチラツと見た気がしました。

ま、気のせいですね

何はともあれ、休み時間。

件のレティさんはクラスメイトのミコアさんと話しかけられていました

⁇「アリスさん? どうなされたんですか~?」

「なんでもないですヨ、朔耶」

わたしがレティさんの様子を見ていると左側から間延びした声が掛けられました。

わたしのもう1人の友人、秋津嶋朔耶。あきつじま さくや

かなり東方の出身で独自の文化があるらしいデス。

特徴的な漆黒の髪をストレートにして太股まで伸ばし、目も同じようく漆黒でタレ田氣味、身長はフローラより少し高め、胸はわたしより大きいです。ま、わたしの場合は体型的にアンバランスなんですが。

朔耶「アリスさん～どうしたのですか～？」

「ん、何でもないですヨ？」

朔耶が不思議そうに顔を右に傾けたのでわたしはとりあえずこまかしました

「ところで何か用デスか？」

わたしが尋ねると朔耶が「あ～」と再び間延びした口調で両手を合わせました

朔耶「明日から選択授業が始まるそうですが～、アリスさんは決まりましたか～？」

「ん～、そうですネ…わたしは風系と雷系ですね。朔耶は決まって

るんですか？」

朔耶「私は～、水系と凍結系ですね～。故郷にいたときも～、それらが得意でしたから～」

朔耶が両手を合わせてにこにこしながら答えました

フローラ「あたしは炎と土系かな」

「実に予想通りですね、姉御」

フローラ「どうこう意味よ」ハ。あと姉御って言つたな」

唐突に話しへ入ってきたフローラにわたしが感想を述べるとソリ曰を再び細めてわたしの両頬をぐにぐに左右に引っ張つてきました。

かなり痛いデス

朔耶「まあまあ～、フローラさんも落ち着いて～」

フローラ「だつてこの口っこ子が」

なんですかそのネーミング。

たしかにわたしは口リである」とには否定はしませんが、そのネーミングはどうかと思ひマス。

何はともあれ、わたしがボケ、フローラがツツ「ハハ」、朔耶がフォローとこんな構図がわたし達3人の立ち位置になつてマス。

そして件のレトマセニコトセんともに教室から姿を消してました

また挨拶出来ませんでしたネ、我がライバルに。
続く？

第2話：【友人】（後書き）

次話の前書きにてフローラの設定を書きます

アリスの友人その1。

名前：フローラ・カドウケウス

性別：女

声のイメージ：川澄綾〇

種族：吸血鬼（混血種。ただし純血にわりと近い）

身長：165cm

35・80・56・82

容姿：腰まで届く銀髪をツインテールにして、派手じゃない髪留めで纏めている。瞳の色は青紫。その為に純血種ではない。体型はスレンダー系。密かにアリスより胸がないことを気にしている。体重と胸の事を言わるとキレる。

性格：強気で短気。口より手が先に出るが面倒見がよく、悪態をつきながらもなんやかんやと手助けしてくれるタイプ（所謂ツンデレ）

魔法：火系と闇（でも闇は苦手）、吸血鬼の身体能力を生かした格闘術。

備考：アリスと同じ地方出身で幼馴染み。アリスの住む地方は種族格差が薄く、それ故に親交を深めていった。

第3話・【学園】

フローラ「それにしても…レティーシアちゃんと綺麗よね」

「どうですか？わたしと同じ口にしか見えませんが」

朔耶「そうですね～、そこはかとない魅力を感じます～」

「そうですかね～？」

わたしは顔を傾けました。まあ…確かに強力なカリスマみたいのは感じマス。でも2人の言つような魅力というのまではわたしには感じませんでした

フローラ「じゃ、私は行くところがあるから」

朔耶「私も～、所用があります～」

「あ、はいテス。また明日」

わたしが小さく手を振るとフローラは軽く右手を挙げ、朔耶は深々と頭を下げて教室を出ていきました

「さて、わたしはどうしますかね」

去つた2人を見送り、思案しながら食堂に繰り出しました

『御主人様』

ボーッとしながら食堂への道を歩いていると唐突に右側から声がかかりました

「（ウーンティですか、どうしたましタ?）」

相手の声に心で念じるように返事をしました。

わたしの契約精霊の1人、風の精霊のウェンティ。見た感じはわたしより頭1つ分高く、髪はわたしと同じ金髪でストレートロング、体型はかなり整っています。ちなみに胸も大きいデス

『御主人様が感じた懸念ですが…』 どこか言いづらそうに視線をさ迷わせ

『どこか異質なものを感じました』

言葉を探すように話しました

「（それってレティさんのことデスか?）」

『はい、理由は分かりかねますが

「（みんなはどう感じましたか?）」

みんなというのはわたしが契約している他属性の精霊さんデス。

普通は1人の魔法使いに1人（形状によつて1体）デスが、わたしの場合は炎・水・風・土・光とほぼ全ての属性の精霊と契約してマス。まー、風と光の精霊とは仲良しなんデ、風と光の魔法が得意といえますネ。

ちなみに名前は、炎の精靈がブレイズ、水がアクシリア、風がウェンディ、土がアーシアス、光がセリウスといいマス。

ブレイズ『アタシもウェンディと同意見だ！なんかあの銀髪ロリ、チート臭えぜ』

なんですか、チートって

アクシリア『チートかどうかはさておき、の方の力は常軌を逸しているとわたくしの直感が知らせていましたわ』

前者のチートがどうのつといったのがブレイズ。深紅の髪に周りが僅かに火の粉が舞い、髪形がポニー テール、目の色はレティさん以上に真っ赤っかデス。服装は真っ赤で豪奢なドレスで胸元が大きく開いたせくしいなタイプです。

後者がアクシリア。深い青色の髪を右サイドのポニーにしていマス。目の色はスカイブルーで服装は東方の着物というのを着ていマス。

『今日は残りの子達が出てきませんネ』

ウェンディ『今日はそんな気分なんでしょう』

『（アーシアスはともかく、セリウスは珍しいですネ）』

ここでおおやつぱに説明すると、ブレイズが口の悪い姉御肌、アクシリアが知的お嬢様、ウェンディが物静かな優等生タイプとみんなバラバラです。残りの子はまたの機会に。

と、わたしにしか見えない精靈とだべっていると目的地の食堂が見

えてきました。

「さて、何を注文しますか…おや」

わたしが注文する物を考えつつ座れる席を探していると見覚えがある人物を発見しました

「??」……ああ、アリストテイルか。お前も食事か?」

「はいデス。まだ何にするかは決めてませんガ」

わたしの存在に既に気付いてたのかすぐに話しかけてきました

彼女はレナス・クレーべル、何でも騎士を多く輩出する国の出身だそうデス。

見た目はといふと、深緑の色の髪を1つに纏め…所謂ボニー・テールという髪型デス。目は青紫色で意思が強そうなつり目、スタイルは長身でかなり整つてます。

何だか女の子に”お姉さま”と呼ばれそうなタイプですね

レナス「……先ほどから呆けているがどうした?」

「ちょっと精神が旅してましタ

レナス「そつか…」

レナスがわたしを可哀想な人を見る目になつて呟きマス

失礼デスね

レナス「何か注文するのではなかつたのか？座る場所に困つてたの
であれば私は相席で構わないと」

「ありがとうございます、じゃあ注文してきますね」

わたしはカウンターまで行き適当に決めた物を5人前ほど注文する
とカウンターの人があくしてました

と、ここでわたしの補足説明しないと困ります。

わたしはぶつちやけるト五体不満足デス。といつても深刻なほど重
くはありません、言語障害…わたしの語尾が変なのはこのせいでし
テ趣味じゃないんですヨ？

もう一つは異常空腹体质。常に腹ペコリス。

まー、これは五体不満足と違いますね、わたしがこつなのは複数の
精霊と通常ではありえナイ”専属契約”を交わしてるからデス。

その弊害として普通の言葉が喋りにくくナリ、腹ペコなのは複数の
精霊契約で魔力が常に消耗し続けるためデス。

まー、わたしのことはさておき。出された5人前の料理を軽々運ぶ
わたしを他の生徒や一部の教師が奇異の目を向けてました

これも補足説明。複数契約による弊害は悪いことばかりではナイと
いうわけデス。これもその一つでしテ、身体強化という類いのもの
デス

他にも色々ありますガ、それはまたの機会に。

レナス「……相変わらず食べるんだな…」

「体質だから仕方ないんデス」

レナス「そりか…」

レナスは困惑した表情を一瞬し、すぐに元の真顔に戻りました

レナス「…ときニアリステイル」

「なんですか？」

レナス「明日の授業はどうするんだ？」

「そですね…てはじめに風系魔法の授業に出ようかと思つてマスよ

レナス「そりか。ならば私と同じだな」

「ああ、そりいえばレナスは風属性でしタつけ」

レナス「お前は闇以外は全て使えるそりだがな」

「でもまんべんなく得意といふわけではないんデスヨ?..」

レナス「普通はそれでも異常だ」

「ですかね」

わたしは会話と食事をしながらヤツのほうが異常ダと我ライヴァルのことを漠然と思い浮かべてました

続く？

第3話：【学園】（後書き）

次話で朔耶の設定紹介。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0578n/>

とある妖精少女の学園生活(ライフ)

2011年7月29日12時22分発行